

日中韓の未来へ 人を育てる

日中韓の大学連携をテーマにしたフォーラム「アジアの未来を切り拓く人材育成を目指す」(立命館大学、広東外語外貿大学(中国)、東西大学校(韓国)主催、朝日新聞社後援)が5日、大阪市天王寺区の大阪国際交流センターで開かれた。3大学は、日中韓の学生が3カ国を2年間かけて移動しながら共同学習や共同生活をする「キャンパスアジア・プログラム」を実施している。3大学の学長・総長が、東アジアに詳しい姜尚中・聖学院大学長と交え、多文化協働型の人材育成の意義について語り合った。コーディネーターは箱田哲也・朝日新聞論説委員。

学長・総長ら語る

立命館大学学長
川口 清史さん



かわぐち・きよふみ 専門は経済学。立命館大の学長や政策科学部長などを経て2007年に学長。日本私立大学連盟常務理事なども務める。

広東外語外貿大学学長(中国)
仲偉合さん



チョン・ウェイフー 主な研究テーマは通訳理論、通訳教育、翻訳学など。中国翻訳協会副会長や中国広東省社会管理研究会会長なども務める。

東西大学校総長(韓国)
張 済国さん



チャン・ジェグク 専攻は政治学、法学。韓国外交部政策諮問委員、米国弁護士など様々な分野にも携わる。慶応義塾大学政治学博士。



カン・サンジュン 東京大教授などを経て今年度から聖学院大学学長。専攻は政治学、政治思想史。新聞、テレビ、雑誌などで幅広く活躍。著書に「在日」「悩む力」「オリエンタリズムの彼方へ」など。在日コリアン2世。

基調講演

聖学院大学学長 姜 尚中さん

私は九州で生まれ、熊本で青春時代を送りました。九州と朝鮮半島、中国大陸はとても近い。経済がうまくいき、大衆的な文化が相互に広がっていき、日本の若者が中国や韓国で職を求め、週末に日本へ帰る、あるいは韓国の若者が平日は九州や大阪で働き、週末に韓国に帰る。そんな未来が訪れるのではないかと夢見てきました。しかし、日中韓の未来には、黒い雲がたちこめ

「一つのアジア」漱石も感じた

過去の歴史から現在を照らし、そこから未来を描けないだろうか。そう考え、日中韓を代表する3人の文豪・夏目漱石、魯迅、韓国の「近代文学の先駆者」といわれる李光洙のことを紹介したい。漱石はロンドンに留学し、日本が無理に無理を重ねて欧化していくことへの疑念を抱いていました。しかし、近代化は避けられな

い。「涙をのんで、上滑りに滑っていかねばならない」と当時何度か語っています。彼は日本を超えて、「東洋」としかいえない知性を持っていました。日本、韓国、中国のベイスになっている漢詩や漢文の世界に親しんでいたことが大きい。「一つのアジア」を感じることができたんだと思います。その漱石に私淑し、強い影響を受けた魯迅もまた、近代化を成し

遂げた日本と、封建制の中にまどろむ中国、そしてヨーロッパの間で、様々な複雑なものを抱えていました。李光洙は、韓国では親日派の作家として極めて否定的な評価を受けています。けれど彼は「韓国の漱石」と言っても過言ではありません。民族主義者、モタニスト、ヒューマニスト、そして親日派として弾圧されたこの人の青春もまた、幾重にも引き裂かれている。3人が悩み、解決できなかった問題が、今も普遍的なテーマとして我々に突きつけられているのではないのでしょうか。

100年前、漱石は「私の個人主義」と題する講演で、「国家が説くモラルより個人の唱えるモラルの方がはるかに高い」と述べました。この姿勢こそ、日中韓の若者に必要なことだと思います。国家には、場合によってはむき出しの対立があります。しかし高いモラルを持った個人が集まることで、初めて無軌道なナショナリズムや国家主義とは違う、人と人との温い合いができます。若者たちが、国家を超えた「東アジア」という意識を持つことができれば、日中韓の未来はきっとひらかれると信じています。

学生の考え方似てきた■学びやすさ 一層工夫を

張 チャンスを十分に活用できるような知識や方法を教えるべきではない。各国の言語、歴史、文化、社会政治などを身につける。そうすることで相手の立場に立つて考えることができ、歴史問題、領土問題などにおける摩擦を最小限に減らせる。

川口 課題はコスト面。現在は文部科学省の支援があるが、今後、大学が自分で負担しなければならなくなるかもしれない。そうした状況の時、学生の支援をどうしていくのかを考え、必要がある。

張 東アジアは大きく発展する可能性がある。だが日中韓に共通するのは不平等の拡大だ。不平等が拡大すると社会に矛盾が大きくなり、それが外側に転嫁される可能性が高まる。

姜 20年前には「アジアのなかの日本」ではなく「アジアと日本」と言っていた。地域の概念は、時代とともに意味が見えだされ、作られていくものだ。若い人たちが意識して作らなければ、「東北アジア」や「東アジア」という概念を持ち、住処とすることはできない。大人は、若い世代に負の遺産を残さないよう頑張らねばならない。



フォーラムでは、「移動キャンパス」の内容と成果について、立命館大学、広東外語外貿大学、東西大学校の学生らが発表した＝大阪市天王寺区、堀内義興撮影

自分の国 客観的に理解■相手知り 寛容生まれる

仲 東アジアは平和的で安定した地域である。そして、ともに力を合わせて発展することが必要だ。(双方がうまくいく)ウィンウィンの関係を築いていきたい。平和的で繁栄する東アジアの建設には、中日韓という3カ国で影響力がある人々の協力が不可欠だ。日中韓のリーダーになるという大きな夢を抱いてほしい。

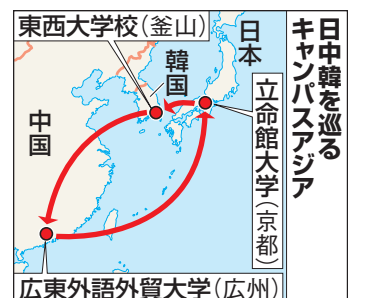
張 3カ国の間には過去のネガティブな記憶がある。それが私たちを支配している。しかし、今日あったことも明日にはもう歴史になる。若い人たちが肯定的な記憶を持つことで、未来は明るく変わっていく。キャンパスアジア・プログラムの恵まれた環境が個人の特性ではないのだと自覚して、韓中日のリーダーになるという大きな夢を抱いてほしい。

仲 未来の発展への責任を担ってほしい。未来の世界は若い人たちのものだ。未来がどうなるかは、努力にかかっている。若い皆さんがお互いを理解し合う包容力を持ち、平和な世界を築く責任を果たしてほしい。未来に向けて、どのように貢献できるのかを考えてほしい。

箱田 若者への期待は。川口 自分の思想や価値観など、基盤となるものをしっかりと作り、それをベースにいろんな人たちとつきあう。それが確立すれば、グローバル化はもっとも怖くない。若者はいろんな体験をすることで、自分を一歩一歩高めていくべき。

3大学のキャンパスアジア・プログラム
立命館大学、広東外語外貿大学、東西大学校の学部学生30人が2年間、3カ国を移動する。学生は1年目、自国以外の2言語を自分の大学で集中的に学習。2年目は中、日、韓の順番で約10週間ずつ滞在し、寮で共同生活をしながら現地語の講義を受ける。フィールドワーク型の授業化を図っている。

業や、週末を利用した文化体験、ホームステイなどの課外活動もある。3年目も同じ順番で移動する。文部科学省による「大学の国際展開強化事業」(2011年度採択分)の中間評価で、最高のS評価を受けた。3大学はプログラムを常設化する方法を決めている。



板東久美子
文部科学審議官

来賓であいさつし、「優れたモデルケースとして、キャンパスアジア・プログラムがさらに発展し、多くの大学に刺激を与えてくれることを期待したい」と述べた。

そつした緊張、対立を小さくし、なければならぬ。社会構造の大きな変化を対外的な問題とせず、未来のビジョンをしっかりと構築することが大切だ。

Global Initiative
先駆者たれ。RITSUMEIKAN
www.ritsumei.jp

立命館大学 大阪いばらきキャンパス
2015年4月開設

